必需 あなたと街のこれから

なぜ今商店街なのか

失えない理由がある。この街にしか果たせない大切な役割がある。いま、手放そうとしているものは何なのか。わたしたちと未来の商店街との関係を探る。

下りたシャッターが目立ってきた金田商店街。市場原理に任せたまま、ただ傍観するだけでは、いずれ街の灯は消えてしまう。商店街を失うことは、わたしたちの豊かな未来への可能性を閉じてしまうことにもつながっている。

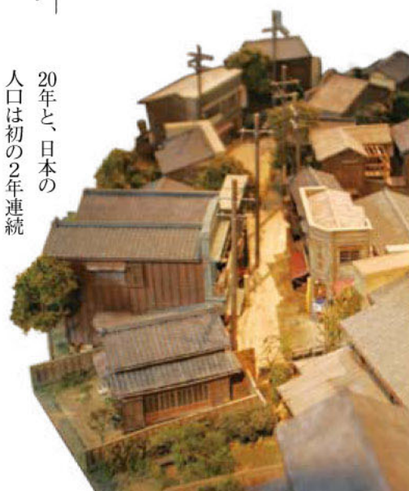
シャッターが意味するもの

商店街は、観光地などと同じ地域資源であると同時に、町を形作る重要な要素の一つ。地域コミュニティーの基盤となる存在です。その商店街がなくなるということは、単なる商店だけの問題ではありません。町にとっては大きなイメージ低下につながり、地域にとっては生活や心のよりどころを失うことになります。そして、わたしたちにとっては、今の生活だけでなく、大きな将来性をなくしてしまうことにつながっているのです。

日常生活の一部だった商店街では、わたしたちが知らない間に、下りてしまったシャッターが目立ってきました。取り返しのつかないことになる前に、わたしたちは今「なぜ商店街が必要か」という問題を改めて見つめなおし、自分自身もかかわる課題としてとらえる必要があるのではないのでしょうか。

来るべき時代を読む

近い将来、商店街が今以上に必要となる時代がやって来ます。平成19年、20年と、日本の人口は初の2年連続の減少を記録。福智町の人口も現在の2万5千人から、およそ20年後には2万人にまで減少すると予想され、高齢化率は39％、住民の約2.5人に1人が高齢者になる地域社会が目前に迫っているのです。そんな来るべき時代に必要な地域やライフスタイルのあり方を考えたとき、団塊世代が高齢化をむかえるこれからの長寿社会で、商店街は不可欠な存在となっていきます。



血の通った商店街

社会や地域とのつながりがなければ、人は心から衰えていきます。平成筑豊鉄道や福祉バスなどの公共交通手段を活用すれば利用できる金田商店街は、町内の交通弱者にとって大きな味方。特に高齢者にとっては最も身近な「社会」です。そんな街がそばにあるという安心感をはじめ、ふれあいと信頼をはぐくんでくれる「人の血が通った商店街」が町内にあるという環境は、今後どうしても必要です。

商店街が大規模店のスケールメリットに対抗できない部分もありますが、逆に小さな商店だからこそできることもあります。信頼のできる商品提供は、その中の大切な要素。「顔の見える商店街」に並ぶ品物には「安心」という付加価値が大きな魅力です。

長年の商売経験とつながりを持つ個人商店は、大量生産・大量販売・価格競争などの環境ではできない、昔ながらの安全で安心な商品をそろえる力があります。お店に行けば必ずその商品のプロがいて、最高の品ぞろえをする。ラジカセのテープの声とは違う、あたたかい心をかよわせる空間がそこにはあります。

なじみの店員と会話がはずむ、心が通じ合う、生きた情報がある商店街は「人と心のつながりの拠点」として、お金では買えない豊かさをもたらす大切な存在意義を担っているのです。

街の声 ●interview in 金田商店街

顔の見える安心と信頼が魅力

大坪 純子さん（金田 宝見）

商店では産地をはじめ、仕入れた人や売る人の顔が分かるので、安心して買い物ができます。消費者の要望が直接届きやすいのも大きな魅力です。

気さくな会話が役に立つ

田中 豊さん（神崎 福丸）

経験豊富な店主のオススメを買えば、まず間違いない。毎日の食材は必ず金田商店街で買います。旬や調理法も聞けるのですごく助かりますね。

昔から変わらない心和む場所

山中 江利子さん（上野 原田）

金田で育ちましたが、店内でのふれあいやちょっとしたオマケなど、商店街のあたたかさは昔から少しも変わっていません。訪れるとほっとする場所です。

元気ももらえる癒しの空間

松本 恵美子さん（伊方 野添）

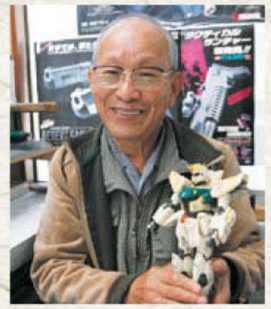
5年前、仕事帰りに店主から「お疲れさま」と声をかけられ元気をもらいました。以来、ここを利用しています。車で来ても特に不便さは感じませんよ。

金田商店街の〝らしさ〟に期待

小畑さんご家族（宗像市）

平成筑豊鉄道で初めて金田商店街に来ました。駅から近くて便利なので“ここならでは”のお土産や食べ物があれば、もっと人が訪れると感じました。

店を閉じようとする今、商店街にしかない「つながり」の大切さ。



木村 喜一郎さん

子どもたちを見つめた35年

夢が並んだ木村模型店

「ガンダムブームのころ。まだ携帯もパソコンも無い時代ですが、子どもたちは物を作る喜びにあふれ、目を輝かせていました」と振り返る木村さん。今年、在庫を限りに閉店することを決めました。

高度経済成長後の社会は便利な物であふれ、それを映すように子どもを取り巻く環境を変えました。親は子守りをテレビやゲームに任せきり。子どもは一人無言で画面とにらめっこ。人とも接さず、対話もなく、人間関係は希薄化していくばかり。その影響が、いじめや引きこもり、犯罪の低年齢化などにも現れています。

「今は便利すぎる世の中ですが『お金や物があるだけが幸せではない』ことを子どもたちに知ってほしい」と話す木村さん。地域ではつながりの元となる家庭のふれあいまでもが失われつつあります。

「うちは小さな店だからこそお客さんと向き合うことができ、その一人ひとりに支えられ、ここまでできました。わたしは店を閉めますが、そういった商店街にしかない〝つながり〟は、これからも大切に残してほしいと願っています」。

子どもたちに多くの夢を与えてきた木村模型店。わたしたちが忘れてしまいそうな、忘れてはならないものがたくさん詰まった商店街の一角で、また一つのお店が歴史を閉じようとしています。